



TITLE:

京大広報 No. 630

AUTHOR(S):

京都大学広報センター

---

CITATION:

京都大学広報センター. 京大広報 No. 630. 京大広報 2008, 630: 2519-2538

ISSUE DATE:

2008-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196459>

RIGHT:



# 京大広報

No. 630

2008.1



ホームカミングデーでの中谷加奈さんによるヴァイオリンの演奏  
—関連記事 本文2523ページ—

## 目次

新しい年を迎えて	総長 尾池和夫	2520
<b>〈大学の動き〉</b>		
新年名刺交換会		2521
平成20年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施		2522
平成20年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査等)の実施日程		2522
第2回京都大学ホームカミングデーを開催		2523
本部消防訓練を実施		2523
自衛消防団員に感謝状を贈呈		2524
部局長の交替等		2524
<b>〈寸言〉</b>		
正々堂々	宮原賢次	2525
<b>〈随想〉</b>		
京都と東京	名誉教授 村松岐夫	2526
<b>〈洛書〉</b>		
私の分岐点	今堀 博	2527
<b>〈栄誉〉</b>		
松本 紘名誉教授(理事・副学長)、佐和隆光名誉教授が紫綬褒章を受章		2528

鍋島陽一医学研究科教授が武田医学賞を受賞	2529
医学教育等関係業務功労者の表彰	2530
<b>〈日誌〉</b>	2531
<b>〈話題〉</b>	
「第1回京都・先端ナノテクスクール」&「第8回ナノ工学セミナー」ジョイントフォーラムを開催	2531
テクノ愛'07を開催	2532
第107回化学研究所研究発表会を開催	2532
能楽鑑賞会を開催	2533
<b>〈訃報〉</b>	2534
<b>〈お知らせ〉</b>	
高等教育研究開発推進センター第77回公開研究会 専門教育との連携を目指した大学英語教育 —ESPの研究成果に基づいて—	2536
<b>〈隔地施設紹介〉</b>	
フィールド科学教育研究センター徳山試験地・北白川試験地	2537

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 新しい年を迎えて

総長 尾池 和夫

明けましておめでとうございます。

昨年末、松本 紘理事から iPS 細胞研究センターの大筋が見えてきたという報告を受けて、私も久しぶりにゆっくりした休暇をすごしました。山中伸弥先生たちの考えている iPS 細胞研究センターの構想では、このセンターを中心にさまざまな研究機関による iPS 細胞研究コンソーシアムを形成して、チームジャパンで幹細胞研究の全体を活性化しながら、再生医療応用を目指した研究を集中的に進めるということになると思います。関係機関のご理解とご協力を得ながら、京都大学としてこのような研究を全面的に支援していく考えであります。

昨年の出来事はたくさんありましたが、日本で五つ選ばれた世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラムの一つが、井村裕夫元総長によって導入された再生医科学研究所の研究活動を中心に組織した「物質－細胞統合システム拠点」であり、さらにその研究成果の中から、山中伸弥先生たちの研究成果が生まれたのです。

他にも昨年、さまざまな素晴らしいことがたくさんありました。京都大学名誉博士の称号を、ジェーリングドール博士に授与したことも忘れられないことです。大晦日には、火星にある直径160キロという大きなクレーターに、花山天文台長であった宮本正太郎先生の名が、IAU(国際天文学連合)によって付けられたというニュースが伝えられました。その他にも素晴らしいニュースがたくさんありました。ウェブサイトのトピックスやニュースリリースのページなどで、ご覧いただきたいと存じます。

新しい年のことを少しくわしく紹介したいと思います。平成20年度の科学研究費補助金は、前年度に比べて19億円増の、1932億円が認められ、とくに若手研究者育成・支援の拡充で56億円の増があり、若手研究(B)と若手研究(スタートアップ)への間接経費30パーセントが措置されました。また「新学術領域研究」が新設され、人文・社会科学の振興として6億円が措置されました。これらを意識しつつ、世界に誇る京都大学の豊富な研究成果の蓄積を背景にして、優れた研究計画をたくさん申請してほしいと思います。

施設整備費で、京都大学のいくつかの念願の改修が認められましたが、桂キャンパスの整備は大幅に



遅れていて、とくに工学研究科の方々は多大の不便に耐えています。国の施設整備に対する投資が少ない現状で、施設整備をどうやって進めていくかが京都大学にとって大きな課題です。

入学定員の改訂

では、要求していたものがすべて認められました。内容は、医学研究科社会健康医学系専攻専門職課程の6名増、情報学研究科の修士課程21名増と博士課程14名減、経営管理教育部経営管理専攻の専門職課程15名増です。

特別教育研究経費では新規で要求した生存基盤科学におけるサイト型機動研究の推進など5件、継続の22件が採択され、再生医科学研究所幹細胞医学研究センターなどで増額されたものが6件ありました。

ご承知のように国立大学法人法の制度の議論の中で予想していなかった効率化係数の導入によって、平成20年度も、京都大学の予算から5億1402万円が減額されました。また病院の経営改善係数として4億4593万円が減額されました。特殊要因経費、特別教育研究経費分を入れると、総額では646万円の減額ですむことにはなりますが、交付金の減額は国立大学の運営の基盤に大きな影響を与えます。

今年は、法律に基づいて行われる大学の評価に関連して特別の年です。今年度の機関別認証評価の結果は3月に発表され、京都大学の教育の内容を広く知っていただく機会になります。平成20年度に行われる国立大学法人の評価は、第1期中期目標期間のうちの4年間の成果に関する評価を受けるもので、第2期中期目標期間の最初である平成22年度の概算要求に反映され、さらに第2期中期目標全体にも深く関係します。

政府の方針として、来年度、学部の定員超過を抑制する仕組みが新しく導入されました。平成20年度以後に入学する学部学生の定員超過率を超えた分の授業料収入額を積算しておいて、中期目標終了時に国庫納付させるという仕組みです。平成20年度は130パーセント、平成21年度は120パーセント、平成



22年度からは110パーセント(定員100人以下の学部は120パーセント)を超えた分に対しては授業料を国が取りあげるという厳しい罰則が設定されたこととなります。留年は2年以内が控除されるという仕組みです。京都大学としては、この制度から大学教育のありかたの根幹に関わる大きな影響をうけます。

大学の仕事は、教育と研究と社会貢献です。このような活動は、学生の納付金やさまざまな公的な資金、市民や企業からの寄附、あるいは産学官の連携などによって行われます。したがって、活動の内容は、市民の皆さんにわかりやすく説明して理解してもらうことが必要です。そのため広報機能は大学にとってたいへん重要な窓口です。今年も、大学の出来事を正確にわかりやすく、かつ迅速に広報する仕事を進展させていくことが必要です。

今年は戊子(ぼし、つちのえね)の年、前回の戊子1948年の福井地震から60年です。福井地震は、西日本の前回の地震活動期最後の大地震で、死者と行方不明者3769名という大震災となりました。その後50年近くの静穏期の後、1995年から西日本は次の地震活動期に入っています。花折断層など活断層の多い京都盆地にある京都大学は、震災の軽減のために常に準備を進めていなければなりません。120年前の戊子の年、1888年には、7月15日に磐梯山が噴火して山体が崩壊し、泥流で461名が死亡しました。その後、前回の地震活動期が始まった1891年濃尾地震は、京都大学創立の6年前に発生しました。

どのような仕事でも安全と安心を基本としなければなりません。職員の皆さんにとくにお願いしたいのは、法的な決まりは最低限の義務であると心得て、わかりやすく親切に学生に接することを常に考え、教育と研究の仕事が効果的に進むための工夫を重ねつつ、今年も密度の高い内容を時間内という心がけで、仕事してほしいということです。

京都大学では、昨年「湯川・朝永生誕100年」を祝って、まだその余韻がありますが、今年、2008年は、また指揮者の朝比奈 隆さんの生誕100年であります。朝比奈 隆さんは京都帝国大学法学部と文学部の卒業生です。法学部在学中に京都大学交響楽団でヴィオラとヴァイオリンを担当し、さらに学士入学した文学部卒業の1937年に、京都大学交響楽団を指揮して指揮者デビューしました。京都大学は、さまざまな人材を輩出してきたことをあらためて思い起こします。

今年は、京都大学創立111周年です。それを記念して京都大学の将来を論じた論文を、京都大学関係の方々から募集します。学習でも、研究でも、どんな仕事でも、時空を超えて物事を見通す力を持つことが大切です。ぜひ111周年記念の論文を応募することによって、しっかりと将来を見通す力を養う機会にしてほしいと思います。

本年もどうか、こころとからだの健康を第一にご活躍くださるようお祈りして、新年の挨拶といたします。

## 大学の動き

### 新年名刺交換会

1月4日(金)午前10時、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長をはじめ岡本道雄元総長、沢田敏男元総長、西島安則元総長、井村裕夫元総長、各名誉教授、各理事・副学長、各部局長および教職員約250人が出席して新年名刺交換会が行われた。尾池総長による新年の挨拶のあと、岡本元総長の乾杯の発声で新年を祝い、同会は午前11時に盛会のうちに終了した。

(総務部)



## 平成20年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成20年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成20年1月19日(土)および20日(日)の両日に実施される。

このため、本学では1月18日(金)の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

- |   |  |
|---|--|
| <p>1. 期日及び試験教科</p> <p>1月19日(土)<br/>公民, 地理歴史, 国語, 外国語, 英語リスニング</p> <p>1月20日(日)<br/>理科①, 数学①, 数学②, 理科②, 理科③</p> | <p>2. 試験場(実施担当学部)及び受験者数</p> <p>本部第1試験場(教育学部)<br/>本部第2試験場(工学部)<br/>吉田南第1試験場(経済学部)<br/>吉田南第2試験場(薬学部)<br/>吉田南第3試験場(農学部)</p> |
|---|--|

受験者数 1,943 人

## 平成20年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査等)の実施日程

平成20年度入学試験(第2次学力検査等)を次の日程で実施する。

### 1. 前期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
2月25日 (月)	国 語	総人「理系」・教育「理系」・理・医・薬・農	9時30分～11時
		総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般」	9時30分～11時30分
	数 学	総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済	13時30分～15時30分
		総人「理系」・教育「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時
2月26日 (火)	外 国 語	総人(独・仏・中)・文・教育・法・経済「一般」・理・医「医学科(独・仏・中)・保健学科」・薬・工・農	9時30分～11時30分
		総人(英語)・医「医学科(英語)」	9時30分～11時50分
	論 文	経済「論文(論文Ⅰ)」	9時30分～12時30分
	地 理 歴 史	総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般」	13時30分～15時
	理 科	教育「理系」	13時30分～15時
		総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時30分
	論 文	経済「論文(論文Ⅱ)」	14時～17時
2月27日 (水)	面 接	医「医学科」	9時～17時30分
		医「保健学科作業療法学専攻」	9時30分～13時30分

### 2. 後期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
3月12日 (水)	面 接	医「保健学科」	9時～12時30分
	論 述	医「保健学科」	10時～13時30分

## 第2回京都大学ホームカミングデイを開催

平成19年11月24日(土)に「第2回京都大学ホームカミングデイ」が百周年時計台記念館を中心に約200人の同窓生・教職員の参加を得て開催された。

午後からの同窓会全体会では、京都大学同窓会会長の尾池和夫総長から開会の挨拶と京都大学の現状



徳永幸雄広島京大会前会長(右)に感謝状を贈呈

についての講演があった。続いて、同窓会代表幹事の本谷雅人理事・副学長より昨年11月の同窓会設立以降の同窓会の活動状況について報告が行われた。

次に、長年にわたり地域同窓会および本学の発展に寄与された広島京大会前会長の徳永幸雄氏に感謝状の贈呈、京都大学同窓会役員を代表して、水野博之大阪電気通信大学副理事長から挨拶があった。

その後、京都大学大学院博士課程に在学中の中谷加奈さんによる「琵琶湖周航の歌」合唱を含むヴァイオリンの演奏、さらに、金文京人文科学研究所長の「授業再現－髪型談義－」と題する特別講演が行われ、全体会を終了した。

同窓会全体会終了後、国際交流ホールで行われた懇親会では、尾池総長、参加者代表として岡本太右衛門岐阜京都大学同窓会世話役、佐藤茂樹衆議院文部科学委員長から挨拶の後、沢田敏男元総長の発声により乾杯、軽音楽の軽快な演奏のなか懇親を深め、

盛況のうちに終了した。また、午前の施設見学では、時計台記念館地下の免震構造、同館迎賓室(旧総長室)、旧石油化学教室(現国際部)、尊攘堂(現埋蔵文化財研究センター)などを巡る吉田キャンパス見学ツアー、西園寺公望の京都別邸として使用された国指定名勝(登録有形文化財)の「清風荘」見学ツアーでは、医学部茶道部の協力によるお点前も披露された。担当教職員の解説を受け、案内の学生と言葉を交わして歩いた卒業生の方々は、普段は目にすることができない京都大学の姿に驚かされていた。

なお、同窓会全体会に先立ち行われた役員総会では、学部・学科等の同窓会の活動との連携を強めるため、今後のホームカミングデイの開催日を11月第2土曜日と定めることが了承され、第3回京都大学ホームカミングデイは、平成20年11月8日(土)に開催することとなった。



普段は一般公開していない清風荘の見学ツアー

(企画部)

## 本部消防訓練を実施

本部消防訓練が左京消防署の指導のもと、平成19年12月14日(金)に行われた。

当日は、本部棟3階で火災が発生したとの想定で、本部職員約200人が参加して、火災確認、119番通報に続き本部自衛消防隊による初期消火、関係部署への通報、避難者の誘導等を実施した。

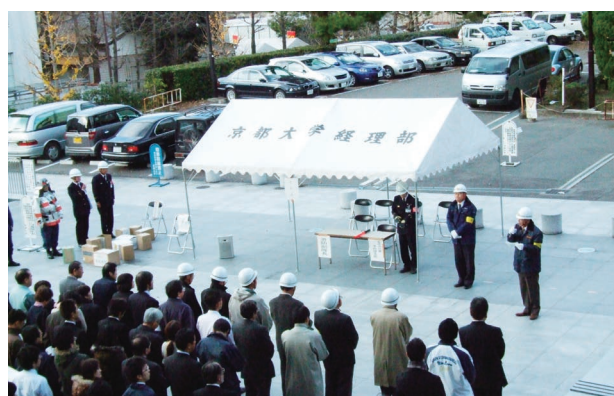
訓練終了にあたり、神田直樹左京消防署予防課長から、吉田構内では一昨年度はたばこの不始末で、昨年度は廊下ダクト部分の発火で大きな火災が発生していることから、この消防訓練を通じて、火災発生時における適切かつ迅速な行動を心がけるとともに常日頃の防火意識を徹底されたいとの講評があった。



その後、火災発生時には迅速な通報が重要であることから通報訓練を行うとともに、屋内消火栓訓練、消火器訓練を行った。

また、附属図書館の東側において、本学自衛消防団の放水によるくす玉割りが実施された。「火の用心」と書かれたくす玉の垂れ幕は、防火意識の啓発のため掲げられた。

(財務部)

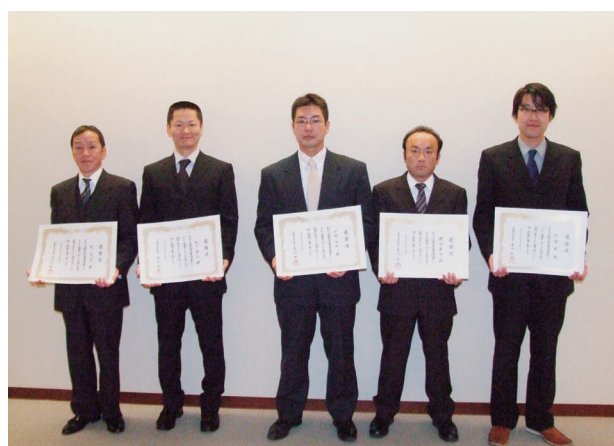


訓練後本部前に集合し講評を聞く職員

## 自衛消防団員に感謝状を贈呈

平成19年12月17日(月)午前10時から本部棟4階の理事室において、自衛消防団員に感謝状および記念品が木谷雅人理事・副学長(総務・人事・広報担当)より贈呈された。

感謝状は、自衛消防団員を継続して5年間務めた教職員に贈られており、今回、感謝状を受けた団員は、牧 良光(契約・資産事務センター)、松下裕之(医学研究科)、宇野圭助(人事・共済事務センター)、瀬田晋司(工学研究科)、片桐 統(理学研究科)の各氏である。



今回表彰を受けた牧さん、松下さん、宇野さん、瀬田さん、片桐さん(左から)

(総務部)

## 部局長の交替等 (新任)

### 薬学研究科長・薬学部長

藤井信孝薬学研究科教授(医薬創成情報科学専攻医薬創成情報科学講座担当(医薬化学))が、富岡 清薬学研究科長の後任として、1月1日付けで選出された。任期は平成20年3月31日まで。



### エネルギー理工学研究所長

尾形幸生エネルギー理工学研究所教授(エネルギー利用過程研究部門担当(電気化学))が、香山 晃エネルギー理工学研究所長の後任として、1月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。



## 寸言

## 正々堂々

宮原 賢次



昭和33年に法学部を卒業後、海外をも相手にする仕事やりたくて商社(住友商事)に入りました。以来50年、昨年6月に会長を退き、相談役となった今、ようやく一区切りがつけました。その間、商社マンとして世界中を駆け巡り、日本経済と共に激動と呼ぶに相応しいビジネス環境の変化を身をもって体験してきました。今振り返ってみても、大変な時代の移り変わりでした。こうした中で商社は時代に応じて自らの役割を変化させながらビジネス基盤を拡大させてきました。この他国にはみられない総合商社という日本固有の業態が、このところようやく正当に評価されてきたような気がします。

これまでの会社生活で、とりわけ社長、会長という経営のトップにあって、私が最も意を用いてきたのは企業倫理、ガバナンスの徹底でした。社長に就任した時期のことですが、社員の不祥事から会社は大変な危機に直面しました。そのとき、この苦難を乗り切るにはまずは会社をひとつにまとめることと同時に、企業倫理をもう一度社員に徹底させる必要性を強く感じたのです。幸いにも、住友グループ各社には住友の事業精神が企業理念の拠り所としてありましたので、私はこれを社員一人一人に再認識させ、事業精神の原点に照らして日々行動することの徹底から改革への第一歩を踏み出しました。

住友の事業精神とは、400年前の住友家初代が商売の心得として家人に残したものをルーツとしており、「信用」、「確実」、「進取の精神」、「浮利を追わず」の4つが基本理念となっています。この基本理念のなかで正確な理解が難しいのが、「浮利を追わず」ではないかと思います。単純に、濡れ手に粟のようなビジネスはいけない、又は、スペキュレーションのようなビジネスはするべきではないという説明をしただけでは、今や十分ではあり得ません。現実のビジネスでは何らかのリスクが付き物であると同時に、

企業は利益を上げなければ存続し得ません。しかも最近のビジネスはリスクがますます複雑化しています。こうしたことを踏まえて、この「浮利…」を社員にどう理解させるか、私が最も腐心してきたところです。

住友家2代目総理事を務めた伊庭貞剛氏が大切にしていた言葉に「君子財を愛す。之を取るに道あり」というものがありますが、これは18世紀の禅師である白隠が伝えた言葉といわれています。「之をとるに道あり」というのは、道に外れた形で収益を上げるようなことはするな、という意味で、私はこの浮利を追わずというのはまさにこのことだと思いました。同時に伊庭貞剛氏は、大阪市立大学の前身である大阪商高の創設者の1人として創立時に揮毫を頼まれ、氏が雄渾な墨筆で「正々堂々」と書かれたものが残っています。私はこの「正々堂々」という言葉は「浮利を追わず」に通ずる考え方だと思います。浮利を追わずとは、利益の上げ方について説いているもので、リスクを取って得られる利益が「正々堂々」と説明できるものかどうかが問われているということです。このような説明をすると、若い人たちにも割合すんなりと理解してもらえるようです。

昨今、創業何百年もの老舗企業が偽装、隠蔽などで捜査を受けるという不祥事が相次いでいますが、先人たちが営々として築き上げてきた「信用」が一瞬にして崩れ落ちるのを見るのは企業人として本当に残念に思います。企業を見る社会の目は、ますます厳しくなっており、企業はこうした環境の変化を十分に認識し、社会的信用を高めるために一層の努力を傾けていく必要があります。

ビジネスはすべての局面において正々堂々とあたねばならず、またどこへ出ても恥ずかしくないビジネスをしなければなりません。この正々堂々の精神は、アカウントビリティとか、透明性にも通じるもので、Business Ethicsとしてグローバルにも通用する考え方です。これから社会に出る若い人たちにも是非このような考え方を記憶に留めて貰えれば幸いです。

(みやはら けんじ 住友商事株式会社 相談役  
昭和33年法学部卒)



## 随想

## 京都と東京

名誉教授 村松 岐夫

研究と教育にも年齢のサイクルがあるようである。京大の定年の直前には、学部運営参加業務が減って、もう一回、大型の科学研究費の申請をする余裕ができた。10年ごとにやろうという計画の下で、これまで2回にわたって「政治家・官僚・団体指導者」調査を行ってきた。そこで、第3回を実施し、かつての2回の調査データと総合して現代日本政治の研究の締めくくりとする計画を立てた。さいわい定年直前に詳細計画と資金の裏付けができて調査も大部分終了できた。しかし、今のところ、成果は一部公表したのみで、完成品は遅れ気味である。定年直後に、病気をしたことも遅れた原因である。定年後の再就職先が東京であったことも理由かも知れない。引っ越しと研究環境の変化は研究能率に関わる（生命にも関わる！）。



しかし、出版の遅れはさいわいでもあった。本プロジェクトの調査は2003年に終了したが、その後の政治を見ることによって第3回調査で得られたデータについて、より強い自信を持って文章にすることができるようになった。データは日本政治に大きな変革が生じたことを示唆しているが、その後の実際の政治がデータを支持している。

東京に来てから、頻繁に聞かれるのは「東京と京都の違いは何ですか」という問いである。同じ専門の方が東京には多くいて、思っていたよりも、東京学術社会とも関係が深くなった。それだけに先のような質問が多くなるのである。「東京と京都の違いは何ですか」といわれて、ふざけているときは、東京は坂が多くて風が強い。それに、道が存外狭くて袋小路が多い。地下鉄が恐ろしく便利であるが、乗り換えのために良く歩く。「東京は自然が厳しく、東京では強い足腰が要求される」などと答えることにしている。しかし、地理的な話しではなく、人々の問いは、本当は、東京は京都に比べて勉学に向いてい

るかという質問である。

これにまじめに答えようとする、悩ましい。率直に言って私の分野では一長一短である。京都において研究する方が政治行政から距離をとることが容易であるために、自然、政治の観察も客観的になる。しかし京都では、筆者のような面接調査から事実関係の確認をとる手法の研究では、時間コストと資金コストがかかる。これに対して、東京では、いつでも必要な関係者へのインタビューができる。このことは大変便利なことであるし、国会図書館に近いという便利さも否定できない。精神の集中をすることさえできれば、研究のスピードを上げることができる。他方、東京で恐ろしいのは研究から目をそらせようとする誘惑である。一見関係があるように思われるが、直接には無駄でしかないような“研究会”や“委員会”に巻き込まれることが多い。これをどう切り抜けるかはなかなかの問題である。

この数年の経験だけから見ても、東京在住の研究者には、現実の政治の先端との接点が多いことがよく分かる。そういうことの影響からか、改革マインドの人が多く。多くの学者が積極的に政治に向かって主張をする。個人として見れば、実際社会へのコミットメントは、会合が増えるし、研究時間が奪われる。注意が散漫になる。そういう危険があるのではないかといってみると、「そんなことは分かっているが、自分の仕事の延長なのだ」という答えが返ってくるが多い。古い世代だけでなく若い世代も同じである。東京は、“現実との関係は不即不離”としていた京都での学術カルチュアとは異なる。そこで、筆者個人の“費用効果分析”をしてみると、結局、京都の方が上である。以上のように同僚に言うよりは「京大ナショナリズムだね」と言われるが、これは仕方がない。京都で研究者として育ち定年を迎えた人間である。アルバート・ハーシュマンの言葉を借りるならば、私は京都から exit できないようである。良くしたもので、種々の学術的な会議の構成でも、世間は私を依然「京大」とカウントする。

（むらまつ みちお 平成15年退官 元法学研究科教授、専門は行政学）

## 洛書

## 私の分岐点

今堀 博



私が一人前の研究者としてやっていけるようになったのには、今までに大きな分岐点があったので、洛書でご紹介したい。私が化学に進んだのは、京大理学部3回生に進級する時に、所属として化学系を選んだことによる。当時、化学教室気鋭の先生方に教養で直接教えをいただき感化を受けたこともあるが、実験化学の意外性が自分に向いているように思えたからである。故丸山和博先生が3回生の有機化学の授業で光合成の重要性を力説されていたのが、今となってみると現在の研究テーマである人工光合成の研究に繋がっている。4回生の研究室配属でどこを選ぶかは大きな分岐点であったと思うが、丸山研究室を選んだ。先生からいただいた4回生のテーマは光合成の酸素発生モデルの構築であった。4回生にとっては手にある課題であったために、実際には丸山研で研究実績のあるキノンの有機光化学反応を始めた。私は系統的にキノンの光反応を検討することで、その反応機構を解明することに成功した。

私の院生として研究生活は比較的順調だったのであるが、逆に自立した研究者としてやっていくには、もっと将来性のある研究を始めた方がよいのではないかと思い始めた。ここで私が選択したのは、米国ソーク生物学研究所でのRNA触媒の研究であった。当時、井上丹先生(現生命科学研究科教授)が主宰されていた研究室で博士研究員として生物化学の研究を始めた。この分野変更という大きな賭けは、私の現在の研究スタイルに大きな影響を与えることとなった。今となってみると、米国で研究者として成功するためには、もっと研究分野の近いテーマから始めて徐々に研究をシフトすればよかったと思う。実際に、現実 is 厳しく、今まで行ってきた化学

と研究・実験内容が大きく異なったために、研究成果が得られるまでに多くの時間を費やした。また、研究成果が得られるまでに、他のグループに同じアイデアの論文を報告され、大きな挫折感を味わった。しかしながら、一方で、私は研究テーマの選び方、進め方など、科学者として最も基本的な訓練を井上先生から一対一でみっちりと教え込んでいただいた。この時の“失敗”体験はその後、どんな困難な局面に直面しても、克服していける自信になったし、研究に対する視野が飛躍的に広がるきっかけとなった。

帰国し、助手として採用していただいたのは、大阪大学産業科学研究所の坂田祥光先生だった。坂田先生は光合成反応中心の人工光合成モデルで先駆的な業績を1980年代初頭に上げていたが、研究は停滞していた。研究の突破口が必要で、その中で私は人工光合成の分野でいろいろなアイデアを試してみた。この時のがんばりには、上記の“失敗”体験が生きている。その結果、最もうまくいったのがフラレンを電子受容性に使うことだった。当時、フラレンを化学修飾できることが分かり始め、研究を開始する機が熟していた。ここで重要であったのは、適当な電子供与体とフラレンを共有結合でつなぎ、電子移動速度を実験的に求めるだけでなく、フラレンの電子移動特性の本質に迫ることに重点をおいたことである。その結果、フラレンの特異な電子移動特性を明らかにでき、フラレンを用いる人工光合成へと大きく展開していくことができた。

以上、振り返ってみると、その時々私の選択が短期的には良かった時も、悪かった時もあった。しかし、現在、総合的に見ると、どの選択も自分が納得いくもので、その後の研究に大きな財産となったと思う。思いがけず、この10月から現在の部局に異動となったことが、今後の研究にどのように寄与するのか、これも私の分岐点になるのではと考えている。

(いまほり ひろし 物質-細胞統合システム拠点教授、専門は有機化学、光化学)

## 栄誉

## 松本 紘名誉教授(理事・副学長), 佐和隆光名誉教授が紫綬褒章を受章

このたび、我が国学術の発展のため顕著な功績を挙げたことにより、松本 紘名誉教授(理事・副学長)、佐和隆光名誉教授が平成19年11月3日(土)に紫綬褒章を受章されました。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

松本 紘名誉教授(京都大学理事・副学長)は、昭和40年京都大学工学部電子工学科を卒業、同大学大学院工学研究科に進学の後、同42年に京都大学工学部助手、同49年同助教授を経て、同62年に京都大学超高層電波研究センター教授に昇任された。その後、宙空電波科学研究センター教授、生存圏研究所教授を経て平成18年理事・副学長に就任、同19年京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、平成4年から超高層電波研究センター長を6年間、同14年からは宙空電波科学研究センター長を2年間務められた。更に、平成16年からは生存圏研究所の初代所長として新研究所の基盤づくりに強い指導力を発揮され、研究のみにとどまらず、大学の管理・運営にも多大な貢献をされている。また、工学部電気電子工学科、大学院情報学研究科、大学院工学研究科の協力講座の教員として人材育成にも取り組まれ、多数の優秀な人材を社会に輩出した。

松本名誉教授は、宇宙プラズマ中で生起する非線形現象の研究に「理論」、「衛星観測」、「計算機シミュレーション」の研究手法で、長年にわたり取り組み、顕著な功績をあげられた。特に、宇宙空間における特異な電波現象である「VLF トリガードエミッションの研究」、宇宙空間を高速で流れる「孤立静電ポテ



ンシャル流(静電孤立波)の衛星観測による発見」と「その発生メカニズムの計算機シミュレーションによる解明」などは、宇宙プラズマ物理学研究の発展における非常に重要な足跡と国際的に評価された。そして、これらの成果が大きな研究の潮流となって、世界中の関連研究者の目を「宇宙プラズマ中で生起する強非線形現象」へと向けるに至った。また、人類の生存基盤を持続させるための新エネルギー源としての「宇宙太陽発電衛星 (SPS)」の研究にも取り組まれ、そのキーテクノロジーである「マイクロ波無線エネルギー伝送」という革新的な技術を確立された。

これら電波科学に関する幅広く、且つ、独創的な研究業績に加えて、平成11年には国際電波科学連合(URSI)の会長に選出され、電波科学の発展において国際的なリーダーシップを発揮された。また、国内においても日本学術会議電波科学研究連絡委員会委員長、地球電磁気・地球惑星圏学会会長などを歴任され、我が国の学術研究発展に尽力された。

これら一連の業績に対し、アメリカ地球物理学会フェロー、英国王立天文学協会外国人名誉会員、ロシア宇宙航行学協会ガガーリン・メダル、文部科学大臣表彰科学技術賞など、国内外から多数の栄誉を受賞されている。

(生存圏研究所)

佐和隆光名誉教授は、昭和40年東京大学経済学部を卒業後、同大学大学院経済学研究科に進み修士課程を経て、博士課程で学び、同42年7月に東京大学経済学部助手に就任された。



学部在学中に書いた論文が理論計量経済学会誌に掲載され、修士論文が数本に分けて世界的専門誌に掲載されるなど、若くして数多くの業績を挙げ、昭和44年に博士論文を東京大学に提出すると同時に、京都大学経済研究所助教授に採用された。同年、出版された『計量経済学の基礎』(東洋経済新報社)によ



り、27歳の若さで日経出版図書文化賞に輝いた。昭和43年、米国ノースウェスタン大学で開催されたエコノメトリック・ソサエティ大会で発表した「マクロ計量経済モデルの各種推定量の小標本特性」に関する論文は学会の注目を集め、昭和45年から翌年にかけてスタンフォード大学のリサーチアソシエートに、また昭和50年から53年にかけてイリノイ大学客員教授に招聘され、計量経済学の方法に関する論文を量産し、昭和51年には、34歳の若さでエコノメトリック・ソサエティのフェローに選出された。

昭和53年に帰国してから後は、科学方法論の観点から経済学の分析枠組みについての考察、日本経済の構造分析、市場主義批判などの分野で多数の著書を刊行し、2007年現在、翻訳書、編著を含めて96冊の書物を刊行している。平成2年以降は、その関心を環境経済学に傾斜させ、平成7年に環境経済政策

学会を創設し、以来、10年間にわたり会長を務めた。また、平成18年に京都で開催された第3回環境経済学世界大会の組織委員長を務め、大会を成功に導いた。平成9年の国連気候変動枠組み条約第3回締約国会議の直前に刊行された著書『地球温暖化を防ぐ』（岩波書店）は、二酸化炭素削減の経済影響に関する不朽の名著として、未だに版を重ねている。

佐和名誉教授は政府の審議会委員を歴任し、とくに中央環境審議会委員を12年間務め、環境税の導入等について論陣を張っている。また交通政策審議会の環境部会長をも務めている。こうした審議会での発言を通じて、政府の環境政策に対しても少なからぬ影響を与えてきた功績もまた刮目に値する。今回の受賞は、これら一連の業績が高く評価されたことによる。

（経済研究所）

## 鍋島陽一医学研究科教授が武田医学賞を受賞

このたび、鍋島陽一教授が武田医学賞を受賞され、東京ホテルオークラにて、平成19年11月12日（月）に受賞式が行われた。

鍋島陽一教授は、昭和47年新潟大学医学部卒業後、同大学大学院医学研究科に進学、同51年医学博士の学位を授与された。同大学医学部助手（生化学）・講師を務め、昭和59年癌研究会癌研究所研究員・主任研究員、同62年厚生省国立・精神神経センター神経研究所遺伝子工学研究部長、平成10年4月大阪大学細胞生体工学センター教授を経て、同年11月京都大学大学院医学研究科教授に就任。平成17年日本学術会議第20期会員、同年10月から同19年9月まで京都大学医学研究科副研究科長を務められ、現在に至っている。また、平成10年度ベルツ賞（共同受賞）、同17年度上原賞を受賞されている。



鍋島教授の受賞理由は、動物個体の発生分化機構、ならびに動物個体の恒常性維持機構の分子遺伝学的研究を行い、以下のような顕著な業績をあげられたことに対するものである。

- 1) 筋細胞における遺伝子発現の制御機構の研究をとおして、「単一遺伝子から複数の遺伝子産物が合成される仕組み」を発見した。
- 2) 筋細胞の増殖と分化の分子機構の解析により、「転写因子の発現カスケード、並びに、その正と負の制御によって筋細胞系譜の決定と分化、増殖が制御される」ことを解明し、細胞分化に関する基本概念の構築に貢献した。
- 3) ショウジョウバエ、マウスの中樞神経系の形成異常を示す変異体の解析を出発点として、「神経幹細胞から神経細胞が生まれる仕組み、機能性神経細胞への運命決定機構、神経細胞が移動して脳の層構造を形成する機構」の解明に貢献した。

- 4) 未分化型精原細胞(精子形成の幹細胞に相当)で特異的に発現する転写因子を同定し、その発現をマーカーとして、「未分化型精原細胞が幹細胞としての性質を保持する仕組み、精子へと分化する機構、未分化型精原細胞のニッチの構造上の特徴の解明」に貢献した。
- 5) 挿入突然変異の解析により多彩な老化疾患類似変異表現型をもつマウス系統を発見し、原因遺伝

子； $\alpha$ -Klotho を同定した。また、その機能解析を進め、 $\alpha$ -Klotho がカルシウム代謝を統合する因子であることを証明し、カルシウム恒常性維持機構に関する新しい概念を提唱した。更に、 $\beta$ -Klotho を発見し、そのコレステロール・胆汁酸代謝、エネルギー代謝制御における役割を解析した。

(大学院医学研究科)

## 医学教育等関係業務功労者の表彰

平成19年度医学教育等関係業務功労者表彰式が平成19年11月30日(金)に行われ、小岸克美医学研究科技術専門職員、水田榮子医学部附属病院副看護師長が文部科学大臣表彰を受けられました。

以下に両氏の業績等を紹介します。

小岸克美医学研究科技術専門職員は、医学部衛生学教室の実験補助から始まり、純系動物飼育室での実験用マウス・ラットの供給、附属動物実験施設における先端的医学研究を支える実験用マウス胚に係る業務や動物飼育ケージ類の滅菌消毒、空調管理など、永年にわたり動物実験の基盤を支え、医学の発展に貢献された。また、医学



研究を開始した大学院生らに実験用マウスの胚移植や外部機関からのマウスの導入に助言するなどして、医学研究を支援された。

さらに、後継技術者の育成と技術開発(飼育機器改良の特許取得)にも熱心で、技術職員研修では講師を務めるなど、この分野の研究教育活動に大きく貢献された。

(大学院医学研究科)

水田榮子医学部附属病院副看護師長は、主に病棟看護師として入院患者の看護に専念された。また、研修会に積極的に参加するなど自己研鑽に努めながら後輩の指導にも熱心にあたり、多くの優秀な看護師の



育成に努めた。

さらに、看護研究活動にも取り組み研究発表を行うなど、常に根拠のある業務を行なうよう努め、また、感染防止対策委員として感染防止対策にも大きく貢献された。

(医学部附属病院)

## 日誌 2007.11.1 ~ 11.30

11月5日	財務委員会	14日	企画委員会
6日	役員会	19日	役員会
7日	第5回日中学長会議(～9日)	21日	国際交流委員会
9日	学生部委員会	〃	11月祭(～25日)
12日	京都大学名誉博士称号贈呈式	24日	第2回京都大学ホームカミングデー
13日	部局長会議	26日	役員会
〃	全学共通教育委員会	28日	企画委員会

## 話題

「第1回京都・先端ナノテクスクール」&「第8回ナノ工学セミナー」  
ジョイントフォーラムを開催

平成19年11月21日(水)に「第1回京都・先端ナノテクスクール」&「第8回ナノ工学セミナー」ジョイントフォーラムがローム記念館大ホールで開催された。午前の部では「ナノテクスクール」が開催され、「電子線描画装置」,「走査型プローブ顕微鏡」,「分光エリプソメトリー解析装置」を題目として、企業の専門家から最先端のナノテク関連機器の動作原理・その応用から最新の技術動向を内容とする講演が行われた。午後の部では工学研究科ナノ工学高等研究院のナノ工学セミナーが開催され、最先端のナノテクノロジーをベースにした多くの異分野融合研究が活発に行われているナノ工学高等研究院の「分子ナノ」,「量子ナノ」,「バイオナノ」グループからの最前線の研究成果紹介が行われた。また今回は、和田恭雄東洋大学教授による「分子エレクトロニクスの展望」,片岡一則東京大学教授による「バイオナノ研究と未来医療」の特別講演が組み込まれ、他大学との研究交流を含めた産学連携の技術・情報交流を実現

することができた。

なお、今回も関係者・一般参加者を合わせて約160人が、関西圏だけでなく関東圏からも参加した。ジョイントフォーラムの後は、産学交流ラウンジで約70人の参加を得て交流会および展示会を行い、関係者・一般参加者とナノ工学高等研究院教員との交流を深めた。



ナノ工学セミナー風景

(大学院工学研究科)



## テクノ愛'07を開催

平成19年11月23日(金)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)棟にてテクノ愛'07(テクノアイデアコンテスト)最終選考会を行った。本コンテストは、「ものづくりから科学技術、そして起業化への関心を高めてもらう」ことを目的に、VBLが(財)近畿地方発明センターとの共催で毎年開催しているもので、身近な生活に役立つ技術から最先端技術まで多彩なアイデアを競う発明コンテストである。11年目を迎える今年のテクノ愛'07には、全国から

過去最多の456件(高校の部373件、大学の部83件)の応募が寄せられた。一次審査を通過した19件(高校の部9件、大学の部10件)の最終選考会には多くの来聴者があり、活発な質疑応答がなされた。審査の結果、高校の部はグランプリ、準グランプリ各1件、大学の部はグランプリ1件、準グランプリ2件が選ばれた。参加者からは、アイデアを練り直して来年も挑戦したい等の意見があり、大盛況のうちに終了した。



高校の部受賞者



大学の部受賞者

高校の部	グランプリ 「レーザーを用いた高感度吸光光度計の開発」	京都市立堀川高等学校 町出明敬さん
	準グランプリ 「実験廃液の簡易処理装置の開発」	京都市立堀川高等学校 齋藤優さん、森川純子さん
大学の部	グランプリ 「組物技術を用いた航空宇宙材料の開発」	京都工芸繊維大学 小林由佳さん
	準グランプリ (ハイテク部門) 「位相差・蛍光同時観察顕微鏡」	広島大学 鈴藤正史さん
	準グランプリ (生活アイデア部門) 「凹面USBポート」	京都大学 久田旭彦さん

審査結果をHP (<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Contest/>) で公開していますので、ご覧ください。

(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

## 第107回化学研究所研究発表会を開催

化学研究所は、平成19年12月7日(金)に宇治キャンパスの木質ホールにおいて、研究発表会を開催した。

開催にあたって、江崎信芳所長より「化学研究所研究発表会は長い歴史を持っている。当初は公開講演会の色彩が強く、所外への研究紹介の場であったが、法人化後は、化研内部でアイデンティティーを求め、高めあう場として益々その重要性を増している。本発表会を通じて化研でしかなし得ない研究を

探求し、発展させてもらいたい」と挨拶があった。

午前の部では、増淵雄一准教授による「高分子の分子レオロジ



熱のこもった発表が行われた研究発表会場

ー」，白井敏之助教による「蓄積リングにおける陽子ビームの一次元オーダリング」の講演が行われた後，京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞の授与式ならびに受賞者3人による講演が行われた。また総合研究実験棟では73件のポスター発表が開催された。いずれのセッションも活発な質疑応答が行われ，熱のこもった発表会となった。

午後の部では，「化研らしい融合的・開拓的研究」で異分野間の共同研究をすすめる若手研究者4名による成果報告の後，平竹 潤准教授による「 $\gamma$ -グルタミルトランスペプチダーゼ（GGT）阻害剤の

分子設計と応用 —GGTの生理的役割をさぐる化学プローブになるか？—」，紙透伸治研究員による「脂肪合成を阻害する小分子化合物」，佐藤直樹教授による「有機薄膜の構造と電子構造・物性の相関についての研究から」と題した講演が行われた。本研究発表会は，所内を含む100人を越える参加者を得て，一般参加者にもわかりやすく興味深い最先端の研究成果が発表され，活発な討論となった。終了後は宇治生協会館で，研究発表会懇親会が約210人の参加を得て盛大に行われた。



江崎所長と左から学生研究賞の村松 渉さん，奨励賞の畠山琢次助教，大野工司助教



総合研究実験棟でのポスター発表

（化学研究所）

## 能楽鑑賞会を開催

第51回能楽鑑賞会が平成19年12月12日（水）に岡崎の観世会館で開催され，小雨が降る天候のなか約450人が来場した。

狂言「鬼瓦」には本年の文化勲章を受章された茂山千作氏が出演され，コミカルな演技に客席からは歓声があがっていた。桜の季節の清水寺を舞台にした能楽「熊野」では片山清司氏の華やかで気品の漂う舞が印象的であった。

当日のアンケートでは3分の2の人が初参加と回答し，「伝統芸能といえども現代に通ずる面白おかしさがあることがわかった」，「能がこれほど面白いとは思わなかった。様々な情景が目に見え引き込まれた」など，初めて触れた能・狂言が想像よりも判りやすかった，との感想が多く寄せられた。また，留学生や外国人の参加者も多く，言葉は分からなくても衣装や楽器，謡など日本の伝統芸能の雰囲気を

十分に味わうことができたとの喜びの声が聞かれた。



狂言「鬼瓦」でコミカルな演技を披露する茂山千作氏

（学生部）



## 訃報

このたび、日比野丈夫<sup>ひびのたけお</sup>名誉教授、渡邊明正<sup>わたなべあきまさ</sup>名誉教授、安藤昭一<sup>あんどうしょういち</sup>名誉教授、六車<sup>むぐるま</sup>ひろし<sup>ひろし</sup>名誉教授、盛<sup>もり</sup>としさだ<sup>としさだ</sup>利貞名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

## 日比野 丈夫 名誉教授



日比野丈夫先生は、7月2日逝去された。享年93。

先生は、昭和11年3月京都帝国大学文学部史学科(東洋史学専攻)を卒業、東方文化学院京都研究所(後に、東方文化研究所に改称)嘱託員を経て、同13年東方文化研究所の助手となった。昭和23年4月東方文化研究所が京都大学人文科学研究所に合併されて改組されるに伴い同日研究員に任ぜられ、同24年6月京都大学人文科学研究所助手、同26年6月同講師、同32年10月同助教授に任ぜられたのち、同43年4月同教授に昇任、歴史地理研究部門を担当した。昭和52年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。また退官と同時に学校法人追手門学院大学文学部教授に就任、同55年

4月より学校法人大手前女子学園(後に、大手前学園に改称)大手前女子大学文学部教授に転じて、同時に同大学長の任につき、同学園理事・評議員を兼任され、平成9年3月に退職するまで後進の指導に尽力された。

先生は、70余年の長きに亘り、東洋史学、特に中国の歴史地理学の研究と教育に携わり、数多くの文献史料のほかに、石刻史料や新出の簡牘類を縦横に駆使して、古代を中心とする中国歴史地理学の分野で輝かしい業績を残された。その成果は『中国歴史地理研究』をはじめとする著書や、日本学士院賞の対象となった共同研究『居庸関』(共著)などに見ることができる。これら長年の研究業績に対しては、平成2年11月旭日中綬賞を受けられた。

(人文科学研究所)

## 渡邊 明正 名誉教授



渡邊明正先生は、8月7日逝去された。享年94。

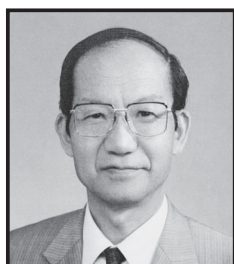
先生は、昭和10年3月東京帝国大学文学部仏蘭西文学科を卒業後、同大学院にて研鑽を積み、財団法人国際文化振興会勤務、在ハノイ総領事館勤務、日本大学予科教授を経て、同24年8月京都大学分校助教授に補せられ、同38年2月教授に昇任、以来26年余の長きにわたって教養部でフランス語の講義を担当されるとともに、文学部および文学研究科においてもフランス文学の講義を担当された。その間、深い学識をもって研究に邁進されるとともに、包容力溢れる人格をもって後進の指導に尽力された。昭和51年停年により退官され、

京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生の研究は、フランスの16世紀末から17世紀にかけての文学研究で、バロック期文学として後に再評価されたこの時代の文学研究に先鞭をつけたものとして学界で高く評価されている。先生はまた、17世紀から18世紀にかけてのフランス小説にも深い関心を寄せ、実証的研究方法により多くの実績をあげられるとともに、優れた翻訳を多数世に送られた。また完成までに24年の歳月を要した記念碑的大著『仏和大辞典』の編纂も忘れることができない。先生は、長年にわたるフランス語教育の功により、昭和50年にフランス政府よりパルム・アカデミック勲章(オフィシエ級)を受けられた。温厚にして闊達な人柄は、常に周囲の人を惹きつけた。

(大学院人間・環境学研究科)



安藤 昭一 名誉教授

安藤昭一先生は、10月17日逝去された。享年80。

先生は、昭和26年3月京都大学文学部文学科(英文学専攻)を卒業後、京都府立朱雀高等学校教諭、立命館大学専任講師、助教授を経て、同34年10月京都大学助教授(吉田分校)に就任され、同38年4月助教授(教養部)に配置換えになり、同49年2月教授に昇任された。その後、昭和63年3月退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられた。

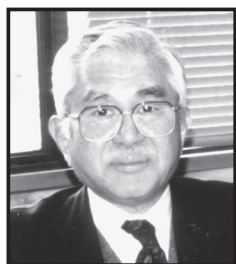
先生は、研究に関しては、アメリカ自然主義文学の研究において著しい業績を挙げられた。なかでもシオドア・ドライサーを、上品な伝統に反抗しつつ来るべきアメリカ社会がはらむ人間疎外の状況を予見した作家であると位置づけ、その作品の今日的意

味を闡明された。さらに、ドライサーが単なる自然主義作家ではなく、根本的には宗教的求道者であったことを解明された。

英語教育に関しては、いち早くLanguage Laboratoryの有用性を見抜き、教養部語学実習室(LL)の設計から完成に至るまですべての段階で指導的役割を果たされた。自らもこの設備を利用した視聴覚教育に取り組まれ、本学の英語教育全体を飛躍的に向上させることに貢献された。

学内における更に波及効果の大きな貢献として、昭和50年代前葉から、教養部英語担当教員の採用人事のあり方を見直し、全国公募による採用人事を推進された。これは、本学全体としても画期的なことであった。これにより、教養部英語教室に、広く全国から有用な人材を集める道が開かれた。

(大学院人間・環境学研究科)

六車 熙 名誉教授

六車 熙先生は、11月17日逝去された。享年77。

先生は、昭和28年3月京都大学工学部建築学科を卒業、同大学大学院特別研究員を経て、同31年同学部建築学科講師、同36年同学科助教授、同40年同学科教授に就任され、同41年からは建築学第二学科に配置換え、鉄筋コンクリート構造学講座を担当された。さらに平成4年7月防災研究所地盤震害部門教授を経て、同6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和37年にコンクリートの二次元クリープ則の提案により日本建築学会賞(論文)が、同55年にアンボンドプレストレストコンクリート構造の曲げ強度に関する研究によりプレストレストコンクリ

ート技術協会論文賞が、同60年にコンクリートの水中疲労に関する研究により日本材料学会賞(論文)が授与された。

また、日本材料学会会長、プレストレストコンクリート技術協会会長、コンクリート工学協会理事、日本建築学会理事、同構造本委員会委員および同プレストレストコンクリート運営委員会主査、国際プレストレストコンクリート連盟日本代表委員などを歴任された。

退官後は、名城大学で教鞭をとられる一方、構造コンクリート研究所を設立し、建築業界における技術コンサルティング業務に従事され、現在に至るまで建築工学の学術・技術の振興と発展に、休むことなく、貢献してこられた。

(大学院工学研究科)

盛 利貞 名誉教授

盛 利貞先生は、12月1日逝去された。享年89。

先生は、昭和17年京都大学工学部冶金学科を卒業、同大学工学部講師、助教授を経て同33年教授に就任、鉄冶金学講座を担当された。昭和57年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和57年4月から平成3年3月まで産業技術短期大学学長を務められた。

先生は化学熱力学、中でも溶鉄中元素の相互作用係数に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、鉄冶金学の分野において多大の貢献をされた。主な著書に『冶金物理化学』、『鉄鋼製錬の基礎』等がある。

また、日本鉄鋼協会、日本金属学会などにおいて、副会長、理事、支部長等の要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成3年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院工学研究科)

## お知らせ

高等教育研究開発推進センター第77回公開研究会  
専門教育との連携を目指した大学英語教育－ESPの研究成果に基づいて－

日 時：2月16日(土) 15:00～17:00

場 所：京都大学吉田キャンパス(吉田南構内) 吉田南1号館 1階会議室

講 師：田地野 彰(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

寺内 一(高千穂大学教授、京都大学高等教育研究開発推進センター研修員)

参 加 費： 無料(事前申し込み不要)

問い合わせ先：〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学高等教育研究開発推進センター 第一部門事務室

TEL: 075-753-3087 FAX: 075-753-3045 E-mail: [hedu@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp](mailto:hedu@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp)

\*メール送信の際、件名に「公開研究会についての問合せ」とお書きください。

詳細はホームページをご覧ください。 <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>

主 催：京都大学高等教育研究開発推進センター

## 隔地施設 紹介



### フィールド科学教育研究センター 徳山試験地 (<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/toku/>)



上空から見た徳山試験地

**沿革** 徳山試験地の前身は、1931年徳山町遠石にあった町有林(36.2ha)の寄附によって設置された農学部の徳山砂防演習地です。この演習地は海軍省との所管換えにより、1942年に隣接の旧試験地(徳山市東山：周南緑地西緑地)に移転し、所属も農学部から演習林になり徳山試験地と改称されました。さらに、1966年、徳山市の緑化公園事業に伴い、現在地(42.6ha)に再移転し、南端の一部を山陽自動車道用地に売却して、現在(41.9ha)に至っています。

#### 職員構成

教員 1 人、技術職員 1 人、  
非常勤職員 2 人

**環境** 徳山試験地は徳山市街地北側に連なる丘陵地にあり、標高は102～351mです。地形は東西の二つの尾根の間に南北方向の比較的緩やかな谷があり、この凹地部分を除いて急傾斜地が多く、西の尾根の西側は国道315号線が通る大きな谷になっています。地質は中生代三畳紀の周防変成岩(三郡変成岩に属す)類からなり、基岩の大部分は強度の変成作用を受けた塩基性

(緑色)片岩で、土壌は比較的深く、やや乾燥しています。冬季の積雪はほとんどなく、早春と夏季には乾燥が著しく、年平均気温15.2℃と温暖ですが、年降水量1,911mmは瀬戸内海式気候としてはかなり多いほうです。

**森林** 徳山試験地の森林の潜在植生は、タブノキ、シイ、カシ類、クロキなどから構成される暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)で、現在も面積の約半分(18.8ha)は天然生林となっています。しかしながら、都市近郊に位置し、これまで薪炭林等として頻繁に人為的な攪乱を受けてきた経緯があり、30年前までは、常緑針葉樹のアカマツや落葉広葉樹のコナラ、クヌギ、ヤマザクラなどの陽樹を多数(約半分)混じえた植生となっていました。ところが、近年、アカマツがマツクイムシの被害を受け、その大半が枯死した結果、照葉樹林への遷移が進んでいるところが多くなっています。

一方、残りの約半分(20.6ha)は、ヒノキとスギを主とする人工林です。その中には、所管換以前に植栽された50～80年生のヒノキ林9.8haも含まれています。その他に、スギの16地方品種を集めた見本林や病虫害に対するマツ属の抵抗性実験林の枯損跡地に導入した広葉樹(ケヤキ、クヌギ、ウバメガシ)植栽林があります。事務所入口から苗畑にかけての道路沿いには、見本園として国内外の緑化樹種を植栽展示しています。

**教育と研究** 演習林所属となった後は、定期的な実習は行われていませんでしたが、フィールド科学教育研究センターに改組になったのを契機として、全学共通科目のポケット・ゼミが開講されるようになりました。現在は一時中断しているものの、瀬戸内地域に所在する京都大学の数少ない施設として、教育に活用するための教育プログラムを検討しています。



徳山試験地でのポケット・ゼミ

天然生二次林の遷移過程を把握するための調査区が1972年には設定され、30年以上継続調査されています。一方、近年における檜皮などの文化財修復用資材の不足という社会的背景と、所管換以前に植栽された高齢ヒノキ林が存在したことから、文化庁による資材確保のための研究に協力し、基礎的研究に取り組み始めました。1998年からは檜皮の採取が生立木の成長や材質に及ぼす影響を調べるために、「檜皮材剥皮実験林」の継続調査が行われており、2007年度には文化庁が推進する「ふるさと文化財の森」(文化財のための備林)の設定に向けての協議を開始しています。その他、暖温帯域における新たな森林再生管理法の開発を目的に、基礎的・総合的な調査・研究に取り組んでいます。

#### 連絡先

〒745-0851 山口県周南市徳山鉢窪769  
TEL: 0834-21-7120 FAX: 0834-21-7121  
<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/toku/>

#### アクセス

・山陽新幹線・山陽本線徳山駅から、防長バス・高尾団地行き乗車(20分)、高尾団地下車のちに徒歩10分。徳山駅からタクシーで20分。





## 北白川試験地(<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/sira/>)



旧演習林本部建物

北白川試験地は京都大学フィールド科学教育研究センターに所属する前には、本部試験地と呼ばれていました。1924年に創設された当時から、見本林および樹木識別実習を目的としての各種樹種がそろえられてきました。

試験地の構内は結構広く、北部キャンパスの北東部にある通用門から始まり北縁を西へ向かって西端に至り、さらに旧馬場の近くまで縁を南下する箇所まで各種の樹種が植栽されています。この北東部通用門から旧馬場近くまで達する縁辺には、我が国の北辺に生息する樹種から始まって照葉樹に至るまで、各種の樹木が植えられています。

これ以外にも旧演習林の建屋の周辺と北側には、外国産樹種を中心として巨大な樹木が現在も植栽されています。ただ、最近の問題としては、巨大化した樹木が倒れる危険性が生じてきたことです。この典型的な例は、8年前の台風接近後に起こった、テーダ松の倒壊です。台風通過後の午前中、旧演習林建屋の東にあったテーダ松が構内道路を越えて東側に倒れ、道路の反対側に植栽されていたウツクシマツ(天然記念物で滋賀県の信楽にしかなく、根元から枝分かれし、直立しない松)が下敷きになったばかりか、道路脇に駐車していた車二台がペシャンコになる事件が発生しました。幸い、怪我人はなかったのですが、これ以降倒壊する危険性のある巨大化した樹種の危険を回避する方法を検討しています。

北部構内北側の民家に隣接する見本林では、民家が被陰されて日当たりが悪くなり、倒壊時には家屋自体が損壊することが予測されるために、今後も注意して樹高の高い樹木については頭頂部の切り落としや、古い枝を除去して風当たりの抵抗を減らす努力を行わなければなりません。

これに加えて、見本林の樹木が高くなると、樹木識別が難しくなるために、低木化を目指さねばならないという必要性も生じています。

試験地の役割としては、樹木識別実習のような学習目的以外にも、構内の見本林の整備に伴って、緑が多い場所を本学構成員に提供するという、保養の意義も増大しつつあります。構内には小さな円形の池も配置されており、昼食時にはお弁当を広げてくつろぐ風景もよく見られます。この意味では近隣の市民に対しても散策の便宜を与えています。

試験地構内でもっとも有名なのは旧演習林の建屋南側にある枝垂れ桜で、北部構内にある桜の中では春一番遅くに咲き、前庭が芝生であることもあってか、毎年賑やかな宴会が開花期間中を通じて開かれます。近年この枝垂れ桜が衰弱傾向にあることがわかり、いろんな手だてを講じてきましたが、樹勢の衰えはサルノコシカケの発生を見るに至って決定的になってきました。おそらく内部には本部が腐敗した空洞がすでに発生しているものと思われ、樹木医に手当を依頼するところまで来てしまいました。

本年春から、知人ぞ知る話題として、アオバズクが営巣し育雛にまで至ったことがあげられます。アオバズクが雛を育て上げられたことは、営巣・育雛に安全であり、なおかつ餌が豊富に提供できるほど、市内では珍しい環境を備えるまでに至ったという事実です。今後も、こうした環境整備に努力を傾けるべきであると考えています。

### 職員構成

教員 2 人、技術職員 3 人、  
非常勤職員 1 人

### 連絡先

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
TEL: 075-753-6457 FAX: 075-753-2264  
<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/sira/>

### アクセス

・市バス京大農学部前、田中樋ノ口町、北白川小倉町の各停留所から徒歩 5 分。